

「お金に愛されないエンジニア」のための新行動論（5）：

投資初心者が見つけた“黄金の組み合わせ”

<https://eetimes.itmedia.co.jp/ee/articles/2207/29/news030.html> [PDF出力]

2022年初頭から、“投資初心者”として、投資の勉強をひたすら続けてきました。その初心者の私に最も適した投資の方法としてたどり着いたのが、インデックス投資です。ランダムウォーク分析×現代ポートフォリオ理論という“黄金の組み合わせ”から成るものです。

2022年07月28日 11時30分 更新

[江端智一, EE Times Japan]



今回のテーマは、すばり「お金」です。定年が射程に入ってきた私が、あらためて気づいたのは、「お金がない」という現実でした。2019年には「老後2000万円問題」が物議をかもし、基礎年金問題への根本的な解決も見いだせない中、もはや最後に頼れるのは「自分」しかいません。正直、“英語に愛され”なくても生きていくことはできますが、“お金に愛されない”ことは命に関わります。本シリーズでは、“英語に愛されないエンジニア”が、本気でお金と向き合い、“お金に愛されるエンジニア”を目指します。

「経済学の勉強は、金持ちになることとは無関係である」

このシリーズが始まってから、私は、金融工学の勉強（基本）を続けてきました。特に先月のコラムでは、金融商品のリターンやリスクの計算式を理解するために、統計や確率の計算式と格闘を続けてきました。

そういう訳で、今回登場する、現代ポートフォリオ理論の数式を見ているうちに、私の脳内では「天空の城ラピュタ」が上映されていました。

- 投資家は自身の資金の $100w_i$ パーセントを金融資産 i に投資するものとする。この投資比率を表す

$w_i, i = 1, \dots, n$ をポートフォリオと呼ぶことにする。比率なので $\sum_{i=1}^n w_i = 1$ を満たす。ポートフォリオ w_i

による投資の収益率を R_p と表すことにする。

- $E, \text{Var}, \text{Cov}, \text{Corr}$ をそれぞれ期待値、分散、共分散、相関係数のオペレーターとする。
- ポートフォリオの期待収益率：

$$E(R_p) = \sum_{i=1}^n w_i E(R_i)$$

- ポートフォリオの収益率の分散：

$$\sigma_p^2 = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n w_i w_j \text{Cov}(R_i, R_j) = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n w_i w_j \sigma_i \sigma_j \rho_{ij}$$

ただし $\sigma_i = \sqrt{\text{Var}(R_i)}$, $\rho_{ij} = \text{Corr}(R_i, R_j)$ である。

「君たち**理系**の学徒は、統計学の基礎も忘れてしまったのかね!? 平均と……こっちは偏差のパラメータだ!! ああ、これはリスク計算の応用だ!! **読める! 読めるぞ!!**」

「……あなたは、いったい誰?」



「ルシータ。私も、君と同じように、もう一つのタイトル（学位）を持っているのだよ。論文名『**ベイズ事後確率を応用した最適ポートフォリオによる投資戦略**』。私は**経済学**ドクター（博士）——『**文系**』だ」

このあと、「目が、目が〜〜」ってなるんですよ

□

昨今、「文系/理系の分類」など、「血液占い」くらい意味がないことかもしれませんが、まあ、それでも、いわゆる理系と言われる学部^①に在籍している学生は、数式と無関係に生きていくことは困難です。

そういう観点で、今回のこのコラムでは、**文系/理系という言葉**を、**意図的（悪意的）に濫用していきたい**と思います。

なぜこんな話を冒頭に持ってきたかという、今回のコラムを執筆していて気がついたことがあったからです。現在の金融投資の理論は、大きく「**（金融）工学**」と「**（行動経済）心理学**」という、全く異なる分野の大きな2本の柱から成り立っており、しかしながら、「投資」そのものの学問は「**経済学部**」の範疇（はんちゅう）らしいのです。

ところが、「経済学部」を調べてみると、どの教授も『お金の流れの仕組みを学問として教える』が、『お金の稼ぎ方までは教えない』と答えています。また、多くの経済学部の先生や生徒たちが、『いろいろな人から、投資の相談をされてウンザリしている』と言っています。

『私の生活ぶりを見れば、“**経済学の勉強が、金持ちになることとは無関係である**”、ということも分らんのか!』という経済学部の教授のコメントを、これまでも多く目にしてきました。

では、どの大学のどの学部であれば、投資（株、債券）に関する学問—— というか、はっきり言えば「**お金持ちになるための勉強**」を学べるのかを調べてみたのですが—— はっきり言って、ドンピシャと思えるような大学や学部は見つけれませんでした。

ちなみに、「金融学科」であれば、国内では、東京大、中央大、武蔵大にあり、海外であれば、カリフォルニア大学バークレー校、ニューヨーク大学タンドン校、コロンビア大学、イリノイ大学などが人気のようです。

しかし、まあ、この手の学部の卒業生の就職先は、国内外の銀行/証券会社/保険会社などの金融業界、シンクタンク、経済産業省、アクセンチュアやマッキンゼーなどのコンサルティング

会社であり、「『老後の生活資金をどうしたらいいの?』と、うろたえているエンジニア」の立ち位置とは、かなり違いがあるような気がします。

とはいえ、私が今回のコラムの執筆準備で調べた限りでは、たとえ個人レベルの投資であったとしても、(1) 数学(統計学と確率論)、(2) 心理学(行動心理学)、(3) マクロ/ミクロ経済学程度の知識はあった方が良いでしょうに思えました。

その中でも特に、**(1) 数学(統計学と確率論)**を武器として使いやすい環境にある、私たち**理系**のエンジニアは、**文系**よりも優位にあると思います——間違いなく大きなアドバンテージになるはずです。

リスクとリターンの考え方を数学的に理解して、老後の生存戦略に挑むことのできる私たち**理系**は——いまだに、動かなくなった洗濯機やパソコンを、**たたいて直そうとする**、ありとあらゆるボタンを押しまくって対応しようとする**文系**の人間たちよりも、理性的な投資戦略が取れるはず——と、思いたい(文系に対する悪意ある偏見です)。

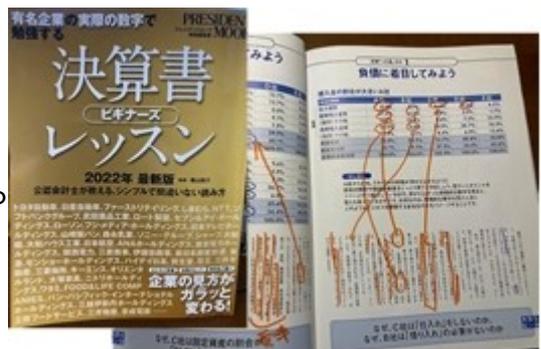
その一方で、リーマン・ショックの時、ニュースで、リーマン・ブラザーズ本社から、段ボール箱を一つ抱えて立ち去るスーパーエリートたちの姿を見ている私としては、「**ダメなときは、何をしてもダメ**」という覚悟の方が大切なような気がします。それでも、「**ダメ**」の内容と規模は、自分でコントロールできるに越したことはありません。

お金に愛されないエンジニアのランダムウォーク

こんにちは。江端智一です。本日は、これまでの4回の連載で、「投資ド素人」の私が、フラフラと手当たり次第、いろいろなことを調べて、ぼんやりと見えてきた、私個人の(×国家の)老後のための投資の(×国家財政の)経緯を、一度まとめてみたいと思います——「**お金に愛されないエンジニアのランダムウォーク**」です。

私が投資の勉強を始めたのは、今年の正月(2022年1月)に、930円(税込)のこの本をコンビニで購入してからでした。

で、私はこの時、「なるほど、投資とはこうやってやるものなのか」と思ったものです——それは、間違っ
てはいなかったのですが、正しくもなかったのです。

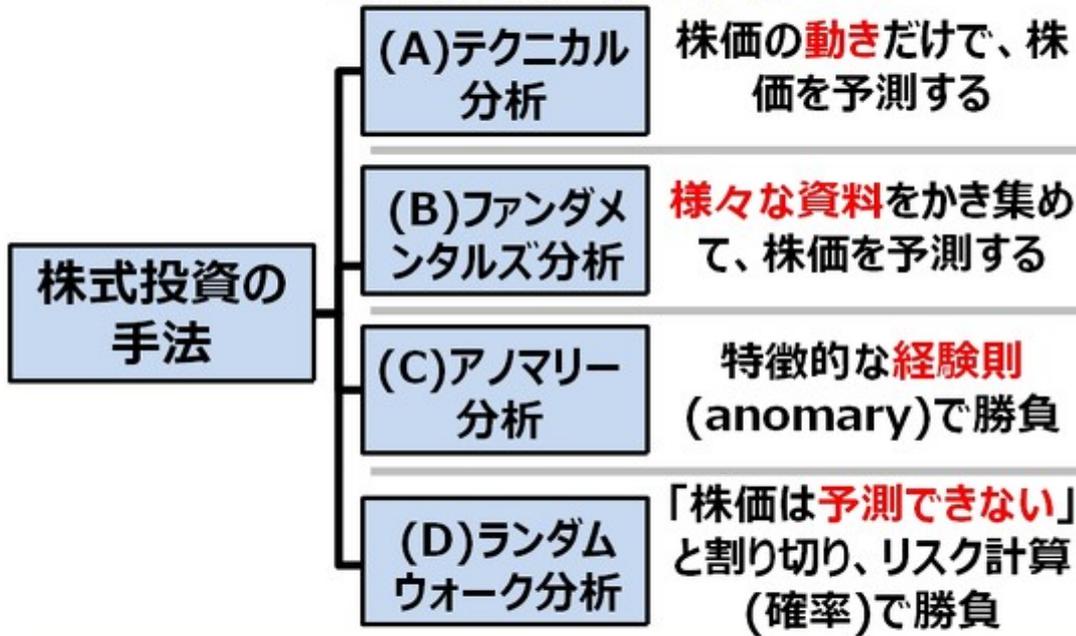


これは、世の中にある投資方法の一つである、**ファンダメンタルズ分析の一手法**で、「決算書」から会社の業績を読み取り、「適正な株価を予想する」というアプローチの一つだったのです。

過去4回の「お金に愛されないエンジニアのランダムウォーク」から、私は「世の中にある投資手法は、ざっくり4つ」と見えています。

投資手法に関する大きな分類

ざっくりと4つくらいかな



この4つは、異なる手法なので、投資を始める前には、十分注意しておく必要がある

これらの4つの概要を、私なりの言葉で語ってみます。

(A) のテクニカル分析は、「ミサイルの軌道計算を行い、目標地点でミサイルを迎撃する」というイメージです。変動し続ける株価を追尾して、目的の値段で売買するというもので、“コンピュータの前でグラフをにらみつけ、売買を繰り返すトレーダー”をイメージしていただければOKです。

比して、(B) のファンタメンタルズ分析は、さまざまなデータ（前述の決算書を含む）をかき集めて、株価の「真の価格」を推定するものです。で、「真の価格」より安ければ買い、高ければ売るというものです。これは、市場の『投資家たちの多くが、間違った株価の評価をしている』、かつ『自分だけは正確な評価ができる』という前提に立つものです。

(C) のアノマリー分析とは、まあ、これまでの投資の観測結果に元づく経験則によるもので、『理由は分からないけど、そういうものなの！』を、投資戦略に取り込む手法、と理解して頂ければ十分です。

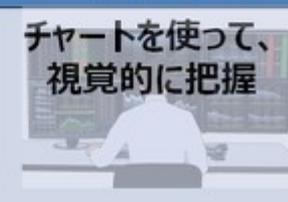
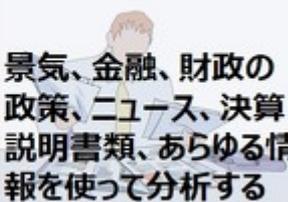
これに対して、(D) のランダムウォーク分析は、上記 (A) (B) (C) を豪快に否定するものです。「株価の動きなんぞ分かる訳ない」と決めつけた上に、「そもそも、正しい株価なんぞは存在しない」という考えに基づく投資方法です。今回のコラムのメインは「そんな投資方法があるのか？」という疑問に答えるものになると思います。

投資の2大手法

さて、Webで、「初心者、投資、入門」あたりでググってみると、大抵、(A)のテクニカル分析か、(B)のファンダメンタルズ分析が出てきます。これ、多分、証券会社側の事情もあると思います（後述します）が、まずは、この2大投資手法について、解説してみたいと思います。

2大投資手法

「(A)テクニカル分析」vs「(B)ファンダメンタルズ分析」

時期	概要	江端イメージ
(1)テクニカル分析	一言で言えば「パターン」分析	 チャートを使って、視覚的に把握
	株価の「動き」"だけ"を見て売買を決める	
	経済に関する知識は不要	
(2)ファンダメンタルズ分析	一言で言えば「"正しい"株価を見つけだす分析	 景気、金融、財政の政策、ニュース、決算説明書類、あらゆる情報を使って分析する
	"正しい"株価より安ければ買い、高ければ売る	
	さまざまな情報や専門的な知識が必要であり、労力が非常にかかる	

- 一瞬の価格の変動を見逃さずに、チャンスと見たら撃ち続ける狙撃攻撃が、テクニカル分析
- 徹底かつ周到な事前の調査によって、敵基地の正確な座標を割り出して爆撃する1回こっきりのミサイル攻撃が、ファンダメンタルズ分析

というイメージです。

私には、コンピュータ解析における、「リアルタイムの画像分析（テクニカル分析）」と「データベースを使った統計分析（ファンダメンタルズ分析）」の違いにも見えます。

ところが、(D)のランダムウォーク分析のシンパ（というか、『ウォール街のランダム・ウォーカー』の著者、バートン・マルキールさんによれば）、(A)のテクニカル分析も、(B)のファンダメンタルズ分析も、**両方、うまく働いていない**、とのことです*）。

*）まあ、本のタイトルからして、他の分析方法にケチをつけるのは当然とは思いますが、この本、初版から45年を経過して、既に12版の重版を重ねている超有名書です。

この本の第5章4項の「チャート分析（テクニカル分析と同義）はなぜ上手くいかないか」、第8項の「なぜファンダメンタルズ分析も必ずしも上手くいかないのか」を、私なりにまとめた内容を以下に示します。

(A)(B)の分析への批判

出典:「ウォール街のランダム・ウォーカー」

時期	ダメな理由	江端の経験
(A)テクニカル分析	(1)パターンを見てから動く→すでに手遅れ	「ビッグデータ」ブームの時に、酷い目にあつた記憶がある (ゴミデータの中には、ゴミしか入っていない)
	(2)結局、「多数投資家への追従」であり、一人勝ちできない	
	(3)パターンは、あまり当てにならない	
(B)ファンダメンタルズ分析	(1)「全て」の情報を使った「正しい分析」など可能か？	「AI」ブームの時(今)に、AIが真面目な予想ができないことを、思い知っている (後付け理由を見つけるのは、凄く上手い)
	(2)人間の数だけ「誤解」や「思い込み」がある	
	(3)マーケットが「間違い」を速やかに修正するわけではない	

テクニカル分析については、「**株価の変動を発見してから動いても、遅くないか?**」ということ、ファンダメンタルズ分析については、「**市場(マーケット)って、そもそも正解を出すものなのか?**」のフレーズが、胸を貫きました——まったく同感です(これも後述します)。

我田引水ですが、私、データ分析については、**相当な場数を踏んできて、ひどい目に遭ってきました。特にひどかったのは、以下の2つです。**

- ビッグデータの中には、まだ他の誰も気がついていないような宝石のようなパターンがある(と、盲信し続けた某会社の幹部)(「[おうちにやってくる人工知能 ~ 国家や大企業によるAI技術独占時代の終焉](#)」)
- AI技術さえ使えば、企業の正しい評価が行える(と言うだけで、AI技術の種類すら挙げることができず、従来のデータベース検索を「[AI査定](#)」と称しているだけのことを指摘もできない) マスコミ

私は、データの動きに意味があるように見えても、その大半が人間の**誤解や思い込み**であることを知っていますし、データ分析の結果が、わずかな数値の違いで**ひっくり返る**ことなど、日常茶飯事でしたので、上記のバートン・マルキールさんの指摘が、心に染み込むように理解できるのです。

もっとも、(A) (B) の分析手法は、それなりに実績もあり、これまで生き残ってきたものですし、なにより、証券会社のコア技術です——顧客に金融商品を売りつけて、手数料をもらう時には、その理由を述べなければなりません。この2つの手法は、**金融商品を売りつける理由を作成する「ストーリーメーカー」**としては、**極めて優秀**なのです。

ちなみに、証券会社は、売り付けた商品で顧客が大損害を出しても、補償はもちろん、謝罪も一切しません。『われわれは、アドバイスをしただけです』と言い放ちます(まあ、当たり前で

すが)。

次に (C) アノマリー分析の説明をします。アノマリーとは、市場における経験則のことです。

「(C)アノマリー(anomaly)分析」とは

明確な根拠はないものの、経験的な傾向
そもそもは、“normal(正常/標準)”の否定語

格言	格言の内容
『節分天井、彼岸底』	2月上旬に高値。徐々に下げ、3月中旬に底になる
『4月効果』	4月の新年度に上昇し、鯉のぼりの季節に下降
『GWの値動き』	ゴールデンウィークは、非常に激しい値動きとなる
『セル・イン・メイ』	5月に入ると株価が下がりやすい(「5月に売れ」)
『サマーラリー』	7月から9月の夏場にかけて株価が上昇する
『夏枯れ相場』	7~8月は値動きが乏しくなる
『TOM(Turn of Month)効果』	株価は月末に下がり月初に上がる
『魔の水曜日』	先物取引の満期日がある週の水曜日は、株価が下がりやすい
『ヒンデンプルグ・オーメン』	テクニカル指標の1つ。このシグナルが点灯すると暴落が起きやすい

案外、格言の信者が、経験則を作っているかも

このアノマリーを「どう使うか」が、戦略になります。というのは、もし市場関係者が、アノマリーを信じて同じ投資行動を行ったら、当然利益を上げることはできません。とすれば、このアノマリーに対して逆の行動を取ることで、勝機が出てくるはずですが、**その程度のこと、投資家は当然分かっているはず**です。

例えば、「魔の水曜日」に株価が下がりやすいのであれば、当然、その水曜日の株は「買い」になるはずで、買いの集まった株価は、上昇してしまいます。これだけで「魔の水曜日」のアノマリーは崩壊です。

もしかしたら、意外に投資家の多くが「アノマリー信者」が多くて、アノマリーに従うような行動を「良し」とするように振る舞っている可能性もあります。人間は、意外に信仰には弱いものです。

で、まあ、ちょっと調べてみたのですが、結果としては「アノマリーは参考程度に留めておけ」というアドバイスの記事が多かったようです。

株価は予想できない、という潔い諦めが出発点

さて、ここから、今回のコラムの本命、(D) ランダムウォーク分析の話に入ります。

前回のコラムの復習ですが「ランダムウォーク」とは、要するに、泥酔して意識のない酔っ払いの、規則性のない歩き方のことです。

ここから「**株価の変動に、法則性を期待してもムダ**」という割り切りが、ランダムウォーク分析の根底にあります。



『ウォール街のランダム・ウォーカー』には、コインの裏と表をグラフにしただけのもを見て、『これは、○○のパターンにマッチしているね！（テクニカル分析による）』てなことを熱く語った人に、その後、その真相（単なるコイントスの結果）を語って気まづくなったという話が記載されています。

「(D)ランダムウォーク分析」とは(その1)

「株価の予想はできない」という“潔い諦め”から出発

(1)江端がエクセルでいい加減に作ったランダムウォーク

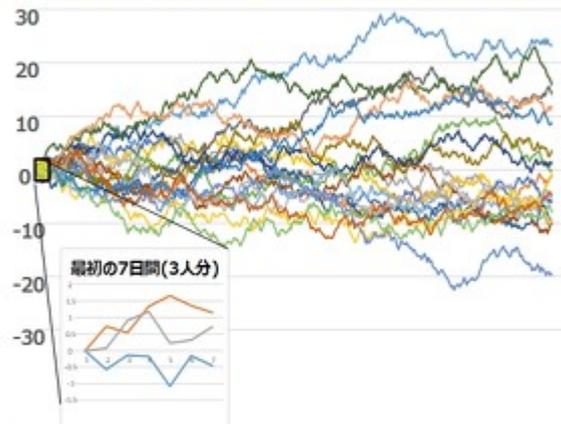


(2)「実際の株価の動き」といっても、投資のプロですら簡単にダマせる



(3)そういう実例が(悪意を込めて)山ほど記載されている(*)

(*)出典:「ウォール街のランダム・ウォーカー」



仮に法則性があったとしても、それが分からないなら、「ない」と同じこと

ちなみに、上記のグラフの一つに某総合電機メーカーの株価を紛れこませています。それを発見できた人は、江端にご連絡ください。

「株価の変動に、法則性を期待してもムダ」といいつつ、ランダムウォークであっても、**分かることはある**のです。

「(D)ランダムウォーク分析」とは(その2)

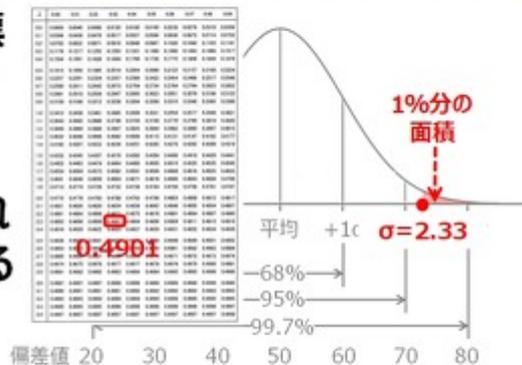
それでも分かること(「リターン」と「リスク」の確率)はある

(1)世の中のどんな事象も、標準偏差からは逃げられない(*)

(*)出典:「お金に愛されないエンジニアのための新行動論(4)」

(2)確率が事前に分かっていたら(かなり高度な)計算ができる

(*)出典:「踊るパスワード ~Behind the Buzzword(2) 量子コンピュータ(2)」



長期的に見た場合、この手法が「最強」
(と、著者は言っているし、私もそう思える)

つまり、酔っ払いのランダムウォークであっても、今から、1分後に、現在地から200メートル先に移動していることは『絶対にない』と言えます(秒速3.3メートル、時速12kmの歩行)。しかし、60メートル先なら、相当に低い可能性ですが、『ない』とは言えません(時速3.6kmのしらふの歩行になります)。

要するに、これが、標準偏差の考え方です。標準偏差と平均値を使えば、リスクとリターンが、算出できます。『ウォール街のランダム・ウォーカー』の著者は、それらをうまく使って運用している「インデックス投資が、最強である」と断言しています(この話は、後半に続きます)。

投資心理と金融工学

さて、ここまでは、4つの投資分析の手法についてお話ししましたが、ここからは、私が、つまみ食いの(×体系的に)調べてみた2つの投資理論、行動ファイナンス理論と、現代ポートフォリオ理論について説明してみたいと思います。

先程の4つの分析と、この2つの理論の何が違うかというと、分析は「やり方(メソッド)」、理論は「考え方(セオリー)」くらいだと思ってください。

「行動ファイナンス」の考え方を使って「テクニカル分析」をしてもいいし、「現代ポートフォリオ理論」を使って、「ファンダメンタルズ分析」をしてもいい、という感じで把握しておいていただければ十分です—— と言うか、私もキレイには分けて考えることはできていません。

さて、行動ファイナンス理論と現代ポートフォリオ理論の違いは、それぞれ、投資心理(心理学)と金融工学(数学)の違い、と説明できます。

まずは「行動ファイナンス理論」について、ざっくりと説明します—— なぜ「ざっくり」なのかというと、「行動ファイナンス理論」を定式化した文献を、(私は)見つけられなかったからです。

投資理論に関する(1)

投資心理に関する代表的なもの

理論	特徴	江端の所感
行動ファイナンス理論	(1)「人間は合理的な行動を取らない」をベースとする理論	「自分の能力への過信」「将来への楽観」という不合理を組込む
	(2)「自分への過信」「将来への楽観」	
	(3)方針は「過度な売買をしない」「値下がりした株をちゃんと売れ」という単純なもの	「人間的な感情を忘れれば、勝てる」でいいのかな？
	(4)その他、「新規公開株には注意」とか「人の話に耳を貸すな」、等	

人間は合理的な行動を取らない —— 行動ファイナンス理論は、この一言に尽きます。これは前述の「アノマリー分析」とも関係があります。

なにしろ、投資家という人間は、

- 値下がりしている株を買おうとはしないし、それどころか、逆に売ろうとするし、
- 逆に、値上がりしている株に殺到するし、

など、古典経済学から言えば、人間は非合理で愚か者の役割を演じているだけです。その癖、『自分だけは、市場を出し抜いてやる』と真面目に信じているのですから、**投資家というのは、本当に救いがたい人間**です。

この投資心理を調べているうちに、以前調べた「行動経済学」と似通っていることに気が付きました。案外、「行動経済学」というのは、市場の金融商品に対する、投資家の非合理的なアクション（わけの分からん投資モチベーション）を理解するために、生まれてきたのかもしれませんが（裏は取っていません）。

行動経済学のアプリケーションについては、「[未来を占う人工知能 ～人類が生み出した至宝の測定ツール](#)」に記載していますので、ここでは、一部のみを抜粋・紹介します。

抜粋:行動経済学のアプリケーション(1)

例	手法	例	使用例
(3)アンカリング効果 →フォン・レストルフ効果	印象的な情報や数値を与える	×「特別価格1万円」	値札に取消価格を記載
		○「通常3万円→特別価格1万円」	
(4)ハーディング効果 →ハーディング効果	集団を作る	×「空いているラーメン屋」 ○「行列ができているラーメン屋」	さくら
(5)損失回避 →サunkコスト効果	「利益」よりも「損失回避」	×「60%で10万円の利益、40%で10万円の損失」(期待値2万円)	「元金保証メニュー」の追加
		○「元金を保証します」	

抜粋:行動経済学のアプリケーション(2)

例	手法	例	使用例
(7)プロスペクト理論 →プロスペクト理論	利益を得る場面ではリスク回避	×「50%の確率で20万円貰える」	場面単位で、提案方式を変える
		○「100%の確率で10万円貰える」	
	だが		
	損失を被る場面では損失回避	×「100%の確率で10万円失う」	
○「50%の確率で20万円失う」			
(9)ギャンブラーの誤謬 →行動ファイナンス	「過去のデータ」をささやく	ルーレットで赤ばかり出ている時、	ギャンブルの最中
		×「赤：50%、黒50%と考える」	
		○「黒に賭ける」	

行動経済学のサンプルプログラムが見つからないんだよねー

プロの投資家の投資行動が、行動経済学のアプリケーションに含まれるのであれば、プロの投資家も私たち素人も、**その知性や判断力においては大して変わりはない**、と言えるかもしれません。

全ての金融商品は「酔っ払い」である

では次に、金融工学に関する代表的なもの「現代ポートフォリオ理論」をご紹介します。

投資理論に関する(2)

金融工学に関する代表的なもの

理論	特徴	江端の所感
現代 ポート フォリオ 理論	(1)「 偏差値と平均とその組み合わせ 」を計算するもの	対象を全て数値化できるので、プログラムに展開しやすそう →ただ、現状に合わない(リーマン・ショックなどでは対応できない)等の指摘もある
	(2)ポートフォリオの収益率の平均(期待値)と分散のみをコントロールする	
	(3)期待収益を上げられる資産ならば、分散(リスク)の小さいものを選択する	

ポートフォリオとは、分散投資のことです。投資できるお金を1つの株や債券に集中させずに、複数に分けて投資をし、そして、**その比率を工夫する**、というものです。

片方の価格が下落すれば、もう一方の価格が上昇するような、そういう相反する関係にある金融商品を購入しておけば、リスクを回避できます。例えば、前回のコラムでお話した、「熱々ラーメン屋」と「冷やし中華屋」の両方の株を持っておくことで、酷暑や冷夏になったとしても、極端な損害を回避できる、というものです(関連記事:「[株価データベースを「Docker」で作ってみる](#)」)。

さて、冒頭で、ムスカ大佐を登場させて「**読める！ 読めるぞ！！**」と言わせた、「現代ポートフォリオ理論」の数式ですが、実はそんなに難しい内容ではありません。

この話を書こうとして、私、今さらながら「リターン」と「リスク」を未定義で使っていることに気が付きました。ですので、簡単に説明します。リターンとは平均値、リスクとは標準偏差値のことです — **うん、全然、分かりませんよね。**

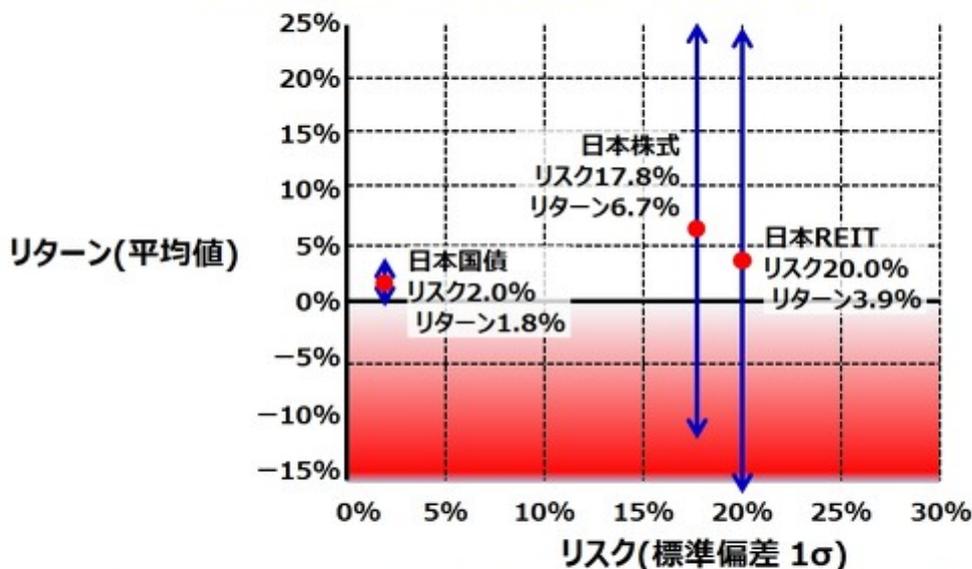
[前回のコラム](#)で、私は、世の中の全ての事象は、標準偏差から逃げられない、という話をしました。そして、先程、酔っ払いを登場させて、**今から1分後に、現在地から200メートル先に移動していることは『絶対はない』**けど、60メートル先なら、相当に低い可能性だが『**ない**』とは言えない、という話をしました。

「リターン」や「リスク」を考える上において、**全ての金融商品（株、債券など）は、酔っ払い（ランダム・ウォーカー）である**、と考えます。そして、リターンとは、その酔っ払いが居酒屋から自宅に向かう**平均歩行速度**、リスクとは、その速度の**ズレ（プラスマイナス）**、と考えればいいのです。これだけでOKです。

さて、ここに、3人の金融商品さん、**日本国債さん**と、**日本株式さん**と、**日本REIT（不動産投資）さん**が、居酒屋に集って、グテングテンになるまで飲んでいた、とします。で、支払いを終えて、みんな帰宅の途につきました（全員、歩いて帰宅できる範囲に自宅がある、とします）。

リターンとリスク

全ての金融商品は、“酔っ払い”



出典:<https://www.pictet.co.jp/basics-of-asset-management/practical-basic-knowledge/risk/20160628.html>

**日本国債は“遅い”が、概ね自宅に向かう
それ以外は“速い”が、逆方向に歩くことがある**

出典は[こちら](#)

この図が示していることは ——

- 日本国債さんは、歩くのは遅いですが、めったに迷走することはありません。そして、大抵自宅に到着します。
- 日本株式さんは、歩くのは速いのですが、かなりの頻度で、逆方向へズンズン歩いてしまうことがあります。
- そして、日本REITさんに至っては、日本株式さんよりも歩くのが遅い上に、逆方向に歩くことも多いです。

ということです。なかなかクセのある3人です。

では、このような酔っ払いたちをどうしたらいいのか —— **1人で帰宅させないようにすればいい**のです。これがポートフォリオです。しかも、標準偏差を用いたポートフォリオは、普通のポートフォリオとは違った「魔法」を見せてくれます。

標準偏差を用いたポートフォリオの魔法

組み合わせると平均以上の効果が得られる

商品	リスク	リターン
日本株100	17.3%	1.8%
先進国株100	18.7%	5.6%
平均	18.0%	3.7%
日本株50と、 先進国株50の 組み合わせ	 16.6%	 3.9%

出展:<https://big-tree.co.jp/column035/>

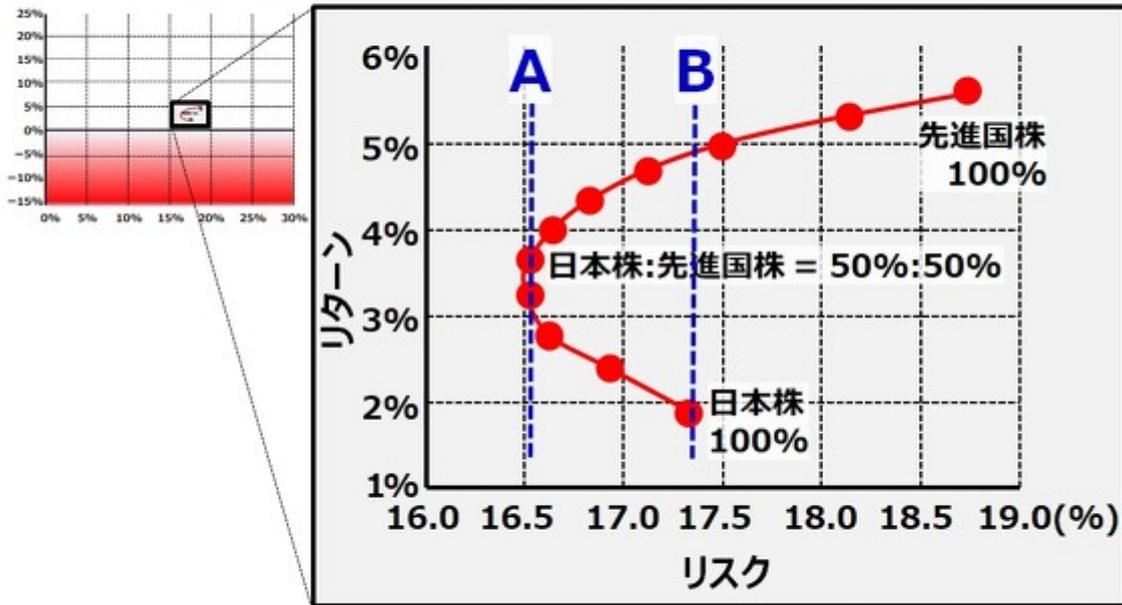
「合成標準偏差」でググって下さい

それは、金融商品を組み合わせると、「リターンが上がり、リスクが下がる」という魔法です(参考)。

上記では50:50の比率でしたが、この比率を変えると、当然、合成したリターンやリスクも変わってきます。では、この比率を変えて見てみましょう。

同じ投資額で、“最適”を発見できる

最も高いリターン、最も低いリスクを選べる



出典:<https://big-tree.co.jp/column035/>

“B”を見れば、組み合わせの効果は一目瞭然

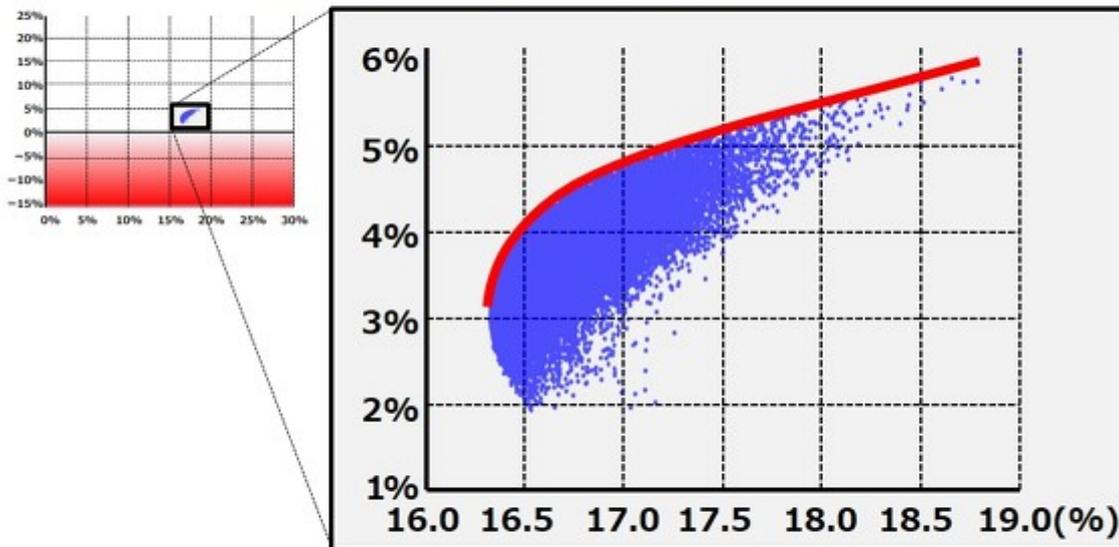
出典は[こちら](#)

弱気な私は、低いリスクで、できるだけ高いリターンを得たいので、“A”あたりの比率を選びそうです。“B”あたりの比率を見れば、同じリスクを払うなら、ポートフォリオを組んだ方が、はるかにマシであることが分かります。なにしろ、**リスクは同じなのに、リターン（利益）が2.5倍も違ってくるのですから。**

さて、2種類の株（日本株、先進国株）などとケチ臭いことは言わずに、投資金額を固定して、種類無制限で、手当たり次第の組み合わせをランダムに試すと、こんな感じになります。

力ずくの計算で、“最適”を発見する

赤い線が“効率的フロンティア”



出典:<https://big-tree.co.jp/column035/>

赤線のどこかの1点のポートフォリオを選ぶ

出典は[こちら](#)

こういう「手当たり次第の計算」は、乱数を使って、コンピュータにでもやらせておけばいいのです（この程度の計算なら、自宅のPCで“数秒”、どんなに遅くても、ランチを食べて戻ってくる間に終わっているでしょう）。

最小のリスク下での、最大リターンをつないだ線（赤線）が、**効率的フロンティア**と呼ばれるものです。この線の上の一点のポートフォリオを選べば、かならず、最適投資戦略になります。

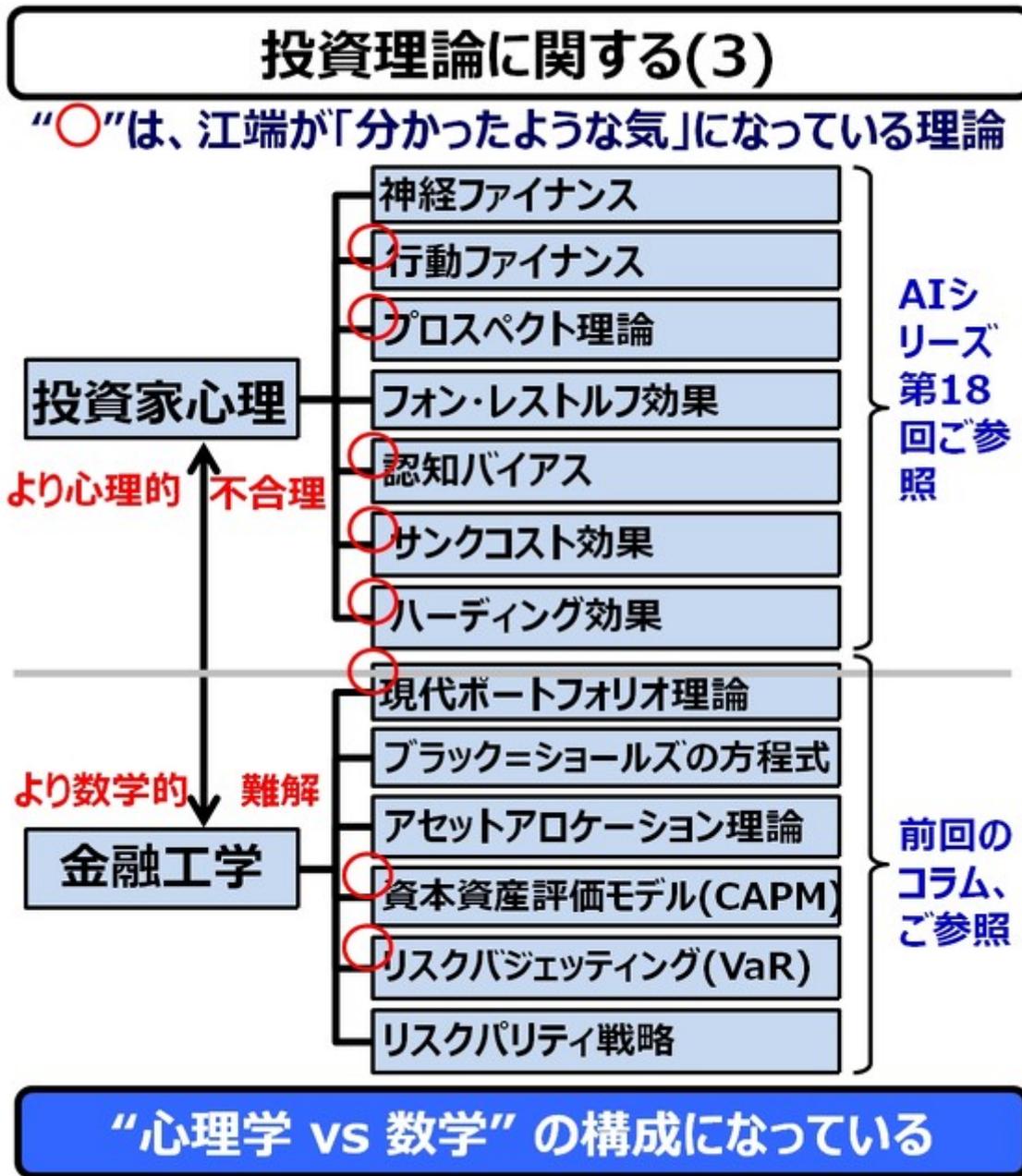
さて、ここまで、リターンとリスクの話からポートフォリオに至るまでの話を続けてきましたが、この（赤線の）効率的フロンティアに基づく投資理論が、「現代ポートフォリオ理論」です。最適なリターンとリスクを得られるポートフォリオは、**計算可能**である、ということを示しているのです。

もっとも、この現代ポートフォリオ理論をもってしても、リーマンズ・ショックやら、国家のデフォルト（債務不履行）やら、災害や戦争などが勃発したら、十分に対応できないというのも事実のようです。なぜなら、リターン（平均値）やリスク（標準偏差）は、長期的なデータがなければ算出できないからで、それらには、突発的な価格の変動を組み込めないからです。

例えるのであれば、酔っ払って、フラフラと帰宅している途中に、ミサイル攻撃を受けるようなものですから — 普通に考えれば、「帰宅」以前の話になります。

逆にいえば、10年単位で運用されている金融商品であれば、**ミサイル攻撃を受けながら帰宅した酔っ払いの情報も加わる**ので、そのような突発的なアクシデントも含んだ「リターン/リスク」の対応も可能となっているはずです。

この2つの他にも、近年の投資理論を手当たり次第調べてみましたが、やはり、心理（投資家心理）と数学（金融工学）との2つに大別できることが分かってきました。



これは、どちらが優れている、というものではなく、投資においては両方必要なものなのだろうと思います。

「投資家心理」の方は、内容そのものは比較的簡単に理解できるのですが、**この定式化やプログラミングは、かなり困難です**。さらに、投資家心理を計算するための、パラメータは数が膨大であり、その上、そのパラメータに対するバイアスの個人差が大きいです。加えて、大抵の投資家は、自分にとっては赤の他人であり、加えて完全な個人情報ですので、それを調査することは絶望的です。

ですので、この理論は、コンピュータシミュレーションの中の、仮想人格（エージェント）に、行動心理を組み込んで検証する方法が、多いようです ———— というか、それしか、やりようがない気がします（もっとも、定式化する方法もあるようですが、一般化するのは難しいそうです*））。

*）関連記事：「[未来を占う人工知能 ～人類が生み出した至宝の測定ツール](#)」

私（江端）は、エージェントシミュレーションについては、私、EE Times Japanでいろいろ試してきましたので、過去のコラムをご参照ください（[こちらの寄稿](#)が、一番まとまっていると思いますので、興味のあるかたはご一読ください）。

比して、「金融工学」は、全部が完全な数学であり、その内容は難しいですが、理解さえできれば、**比較的簡単にプログラムに組み込めます** —— 何しろベースとなるパラメータは、2つだけ（平均と標準偏差）ですので（後述します）。

「市場」とはそんなに賢いやつなのか？

分析やら理論やらの説明で、私がちょっと疲れてきましたので、少々、私の戯言（たわごと）におつきあいいただきたいと思います。

「市場」って一体何なのでしょう？ 私、選挙の後に「市場の反応は……」というフレーズを聞く度に、不快な気分になります。『**私に直接アンケートしに来いよ**』と言いたいです。市場の反応といってもしよせんは数字（金融商品の価格）じゃないですか？

—— 市場ってのは、そんなに“かしこい”やつなのか？

と、思っています。

“市場”って、そんなに“かしこい”のか？(1)

ニュースで、よく聞かれる「市場の反応は……」

	ダメな理由		
よく聞かれるフレーズ	「市場の反応はネガティブである」		
	「世界の金融市場の反応は予想どおりだった」		
	「しかし、市場の反応は厳しかった」		
“市場”って何だ？	日本の国民全員が	■ 株式や ■ 債券の売買をしている ■ 国内の会社の業績/事件・自己/人気、■ 金利、 ■ 外国為替、■ 景気、■ 政治、■ 天候、■ 国際情勢を、気にしている	はずがない

“神託”のように扱われているのが“不快”だ

何が不快って、**市場（の価格）が、まるで国民の総意のように扱われていること**です。私の不快感は、コロナ災禍で、mRNAワクチンが登場したあたりの「日経株価の気の狂ったような上

昇」の時にMAXになりました。

ワクチンの効果も持続期間も分からない上に、まだ、事実上のロックダウンが続いており、企業の業績見通しなんぞ、1ミリも見通せない、視界ゼロの状態での、あの狂乱は、

—— 渋谷のハロウィン騒ぎで、ノリで器物破損をする“低能”と、大して変わらんのじゃないか？

と思っています。

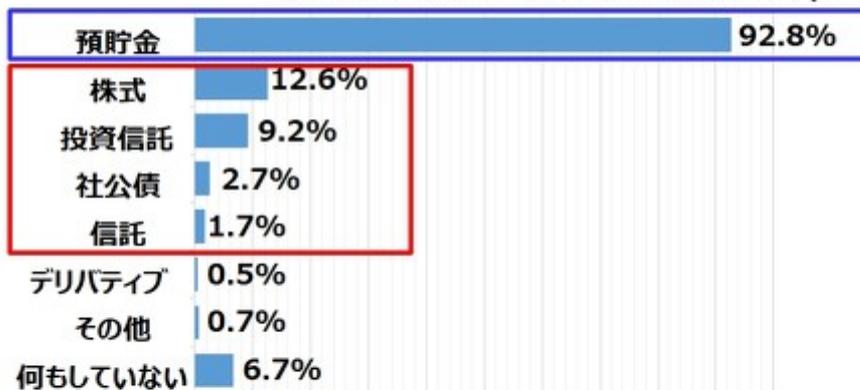
投資市場に1mmも関わっていないのに、この阿呆な「市場」の中に、私が含まれているかのよ
うに扱われることに不快感を覚えています。

それに、市場が、日本人の総意であるとするなら、日本人全員が、投資に参加して、ファンダ
メンタリズム投資における「正しい株価」を求めて、世の中の全て事象を知っている、という
ことにならなければなりません。—— 下記のデータを見る限り、投資に関わっている人は、一部
の人間です。

既出:他の人はどうしているんだろう？

日本証券業協会 平成30年度 全国20歳以上、7000人のデータ

<https://www.jsda.or.jp/shiryoshitsu/toukei/data/files/h30/H30gaiyou20181219.pdf>
重複も含んでいるから、全体は100%を越えている(126.9%)

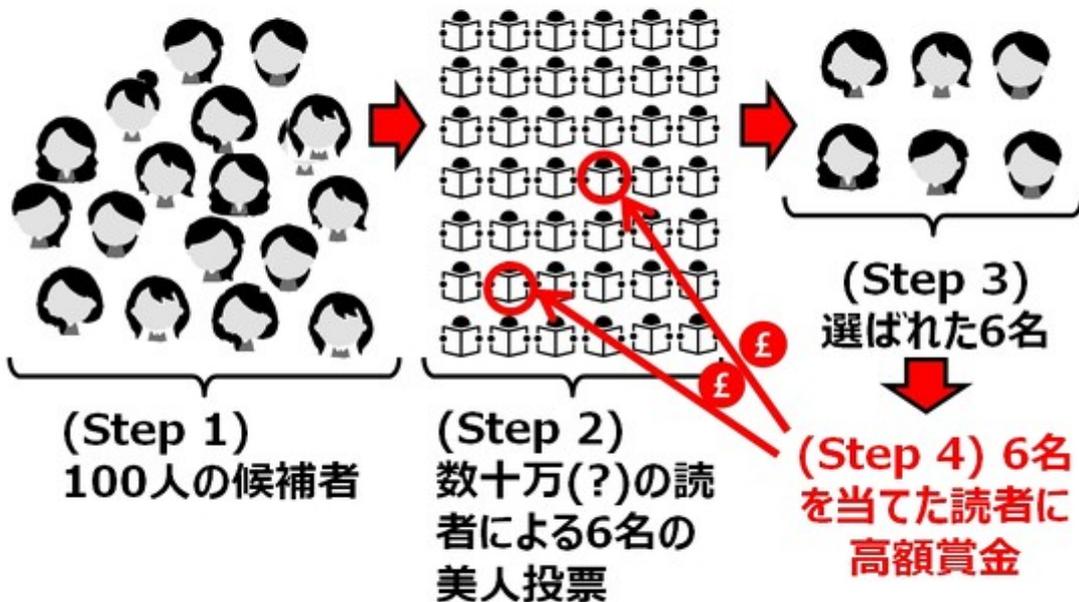


預貯金が“ブッチギリ”なのは当然として、
2割の人は、貯金以外のこともやっている

これについて調べていたのですが、市場は、(1) それなりにクレバー（利口）であった、と、
(2) やっぱりバカであった、という、相反する2つの解釈を見つけましたので、ご紹介します。

“市場”って、そんなに“かしこい”のか？(2)

一つの解釈：“市場”は、“選挙の投票所”ではなく
「美人投票(byケインズ)である」



「より多くの読者が選ぶ美人」を選ぶ→投資家は『多くの人々がどう考えるか』を考える

これは、経済学で「美人投票」と呼ばれる考え方で、経済学者のジョン・メイナード・ケインズさんが、投資家の行動パターンを表す例え話として示したことから使われるようになったものです。

投資とは、「100枚の写真の中から最も美人だと思う人に投票してもらい、投票が多かった人に投票した人達に賞品を与える投票」と説明し、この場合「投票者は自分自身が美人だと思う人へ投票するのではなく、『他の人が美人だと考える』美人への投票である、と言いました。

この考え方を押し進めていけば、投資家は、日本人全員が世の中の全ての事象を知っているという前提で振る舞い、その結果、「正しい株価」というのが、市場で実現されるはず、という理屈が、(一応)通ります。

ただ、この理屈には、面倒な自縛のわなが潜んでいます。他の人が選ぶべき6人が、多くの人々が当てたら、当然、高額賞金は分割支払いされて、少額になってしまいます。投資家の目的は、美人を選ぶのではなくて、賞金を得ることなのですから、これでは本末転倒です。

(以下、読まなくてもいいですが)

他の投票者も、「多くの人々が選ぶ美人」を選ぶのでと考えるので、それではダメで、『他の投票者も、「多くの人々が選ぶ美人」を選ぶのでと考えた場合の、他の投票者の選ぶ人物(もはや、美人であるかどうかは問題ではない)』を選ばなければならない、と考えます。しかし、『他の投票者も、「多くの人々が選ぶ美人」を選ぶのでと考えた場合の、他の投票者の選ぶ人物(もはや、美人であるかどうかは問題ではない)を選ぶと考えた場合』……と、という思考ループに陥ると、

最終的に、最も人気のない美人(?)が選ばれる、という、奇妙な結果になるのです(ナッシュ均衡のパラドックス)。

もう一つは、「より馬鹿理論」と呼ばれるものです。今回は、これを、以前書いたNFT(Non-Fungible Token: 非代替性トークン)の例で説明してみます。

江端が2時間くらいで書いたイラストをNFTにした場合に、市場関係者の無知によって、値上がり続けるという話です。特に、バブル相場では、異常な高値で買って、それ以上の高値で買ってくれる「より馬鹿な市場参加者」が存在する限り、売りつけることが期待できるのです。

“市場”って、そんなに“かしこい”のか?(3)

もう一つの解釈: 「より馬鹿」理論(Greater fool theory) (出典:ウォール街のランダム・ウォーカー)

■ NFTの例で説明



例え、本質的価値の100倍で購入しても、それ以上の値段で売れば儲かる

…「“NFT”や“ビットコイン”はそういうものだ」と、
ビル・ゲイツさん(×江端)が言っていました

“市場”は、「クレバー」ではない
私たちの「愚かさ」をも反映する鏡である

最終的に、投資家は、価格が現実と乖離(かいり)していることを否定できなくなり、その時点で売りが出て、価格は著しく低下し、公正価値(場合によってはゼロ)に近づいていくことになります。

『ウォール街のランダムウォーク』の著者、バートン・マルキールさんは、『この仕組みは一種のねずみ講であり、初期の投資家から株を買う、より軽々しく信じがちな投資家を見つけなければならない。やがて、より愚かな者がいなくなる。(そして、そいつがババを引いて終わり(江端追記))』と述べておられます。

暗号資産(ビットコイン、NFT)は、この「より馬鹿理論」の典型例として、ノーベル賞受賞者数名を含む数多くの経済学者から、ボロカスに言われているようです——が、それは、私(江

端)ではありませんので、**この論争に私を巻き込まないでください** (私のビットコインに関するコラムはこちら*1)、*2)です)。

*1) [「ビットコインの正体 ~電力と計算資源を消費するだけの“旗取りゲーム”」](#)

*2) [「ビットコインの運命 ~異常な価値上昇を求められる“半減期”」](#)

上記のコラムをリリースした後、ブログやYouTubeで「江端“ビットコイン”解釈」の批判キャンペーンが大々的に展開されていました。理論的な反論もありましたが、感情的なもの (“江端は低能”と罵 (のの) するもの、など) も多かったです。

私は、ビットコインやNFTなどの暗号資産に思い入れのある人たちが、正直怖いです。それは、『昨今の相場』が理由ではありません (昨今のビットコインの相場は、悲慘の一言に尽きますが)。**彼ら**には、「利益」だけが目的ではなく、そこには暗号資産に対する「愛」があるからです —— 多分。



そもそも、「愛」なくして、こんな価格がつくとは思えません (下図、ご参照)。

既出:常軌を逸する価格のNFT

そもそも、こんなものがNFTになるのか？
というようなモノもある

対象	価格	内容	対象
デジタルアート	76億円	アーティストのビープルさんの作品 「Everydays: The First 5,000 Days」	
メッセージ	3.2億円	Twitterの最高経営責任者（CEO）であるジャック・ドーシさんの最初のツイート	
動画	2300万円	米MBAのレブロン・ジェームズ選手のダンクシュートの動画	
仮想現実(VR)作品	1300万円	VRアーティストのセキグチアイミさんの作品 「Alternate dimension 幻想絢爛」という作品	
デジ絵	640万円	デジタル漫画アーティストのクリス・トーレスさんの「猫の画像」	

その「暗号資産に対する愛」は、私の「特許発明に対する愛」と同じ範疇なのかもしれませんが—— まあ、それはさておき。

結論として、「市場ってのは、そんなに“かしこい”やつなのか？」という私の疑問に対する、私なりの解釈を、天気予報のニュースキャスター風に言うのであれば、

—— 「かしこい」、時々「馬鹿」。ところによって、想像を絶するほどの「大馬鹿」

という感じです。

閑話休題。

ランダムウォーク分析×現代ポートフォリオ理論で何ができる？

さて、「株価は予想できないけど、リスクとリターンは計算できる」（ランダムウォーク分析）に、「組み合わせによってリスクとリターンを調整できる」（現代ポートフォリオ理論）を組み合わせると何ができるのでしょうか？



ある指標（インデックス）に追従して、価格が変動するような金融商品が作れてしまうのです。これが、インデックス投資商品です。

前述した通り、インデックス投資も、前述の効率的フロンティアなどを使っているのですが、従来のポートフォリオとは格段に精度の異なる運用されていると推測されます。

まあ、「あの江端が書籍『ウォール街のランダム・ウォーカー』に"洗脳された"」の一言で十分なのですが、一応、理系のエンジニアとして、筋の通った説明をしますと、ざっくりこんな感じですよ。

江端の本命「インデックス投資」

「ランダムウォーク分析」+「現代ポートフォリオ理論」

理論	特徴	江端の感想
メリット	(1)一言で言えば「市場全体の動きに連動した投資成果を目指す手法」のこと	美味しい
	(2)「インデックス(指標)と連動する」という運用方針が分かりやすい	
	(3)1商品の中で分散投資ができているので、複雑なポートフォリオの計算が必要なさそう	
	(4)運用コストが安く、面倒も少なそう	
デメリット	(1)インデックス以上の儲けは『諦めなければならない』	我慢できる
	(2)元本割れがありえる	
	(3)短期間では“旨み”はない	

私には、証券会社の社員の方のように、“ノルマ”がある訳でもないので、この内容で十分

本コラムの第1回「[定年がうっすら見えてきたエンジニアが突き付けられた「お金がない」という現実](#)」で述べたように、私には、これからの人生を大きくひっくり返すような大望があるわけではありません。Amazonと秋葉原で本とデジタルガジェットを購入できる程度の小金と、コラムを書き続けるだけの時間の余裕があれば、十分です。

それに、本当かうそかは知りませんが、書籍『ウォール街のランダム・ウォーカー』では、インデックス投資が最強と言っているのので、それを信じているだけです——まあ、**このような考え方が、カルト宗教への信仰と大して変わらないことは理解していますし、反論もしません。**

ただ、その教義の内容が、「教祖の言葉」ではなく「数値データと数式」である、という点、そして、それを私が自力で確認できる、という点において違うとは思いますが。あと、**誰かを恨まらずに生きていけそう**、という点も気に入っています——そこには、「全て自業自得」という潔(いさぎよ)い世界があるだけです。

それに、私のライフスタイルから考えても、これが『最適』——というか、結局のところ『ラク』なのです。

既出:江端が選ぶべき投資(5W1H)

違いがあるとすれば「判断の時間」と「リスクの大きさ」

	『江端』の特性	インデックス投資
いつ	基本的には休日しか対応できない →リアルタイムの取引とか無理	○
どこで	自宅でしか対応できない →在宅期間中でも、勤務時間中はできない	○
誰が	優柔不断で、小心者で、すぐに責任転嫁し、うじうじと後悔を続ける私	○
	数字を見れば、解析して、分かった気になれる私	
何を	債券市場の他人の心理を読み取る技量→絶無	○
	記載されたデータを自動解析するプログラムを作成する技能→あり	
なぜ	『個人的な定年後の金融危機』を回避したい	手段は問わない
どのように	数字と解析で (×勘、×度胸)	○

「インデックス投資」しか、取り得る戦略なし

とはいえ、インデックス投資とは、つまるところ「追従」ですので、ある指標（インデックス）が下落すれば、当然に、追従して下落します。

ただ、10年単位でインデックス（日本、米国、世界）を見た時、下がり続けるインデックスを見つけることは難しいです。いわば、それは、小さい子どもがずっと同じ体格を維持し続けるくらい難しいです。そういう成績の悪い債券（株式など）は、市場から消滅して、インデックスの構成要素から無くなってしまうからです。

インデックス投資が、「ほったらかし投資」といわれる所以（ゆえん）は、ここにあります。

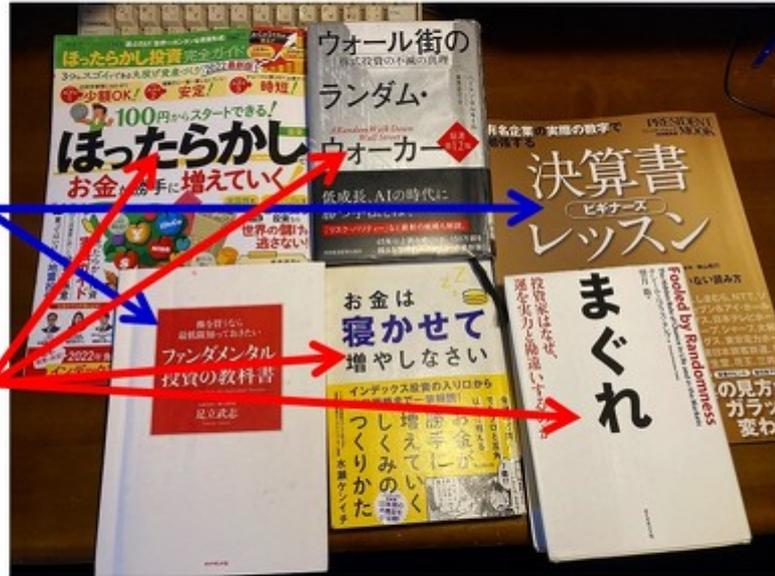
江端の愛読書をご紹介

最後に、これまで私が読み倒してきた本をご紹介したいと思います。著書名などを調べるのは面倒なので、読みたい方はタイトルから適当にググってください。

今年に入ってから、江端が読んだ本

代表的なものだけ

- (A)テクニカル分析
- (B)ファンダメンタルズ分析
- (C)ランダムウォーク分析
- (D)アノマリー分析



「インデックス投資」に偏向しているかなあ..

最初、上記の4カテゴリーがあることも知らずに、ファンダメンタルズ分析の本を読んで、その面倒くささに、うんざりしたのですが、その後、「ほったらかし投資」から、ランダムウォーク分析の方に傾倒していきました。

昔、テクニカル分析の本も読んだはずだったのですが、今回は見つけられませんでした。「45日間の平均線が、〇〇の線と交差したら、買い」てなことが書いてあったような記憶があります。

テクニカル分析も、ファンダメンタルズ分析も、プログラマーでもあり、データアナリストでもある私にとって、魅力ある分析手法なのですが、「“ほったらかし”の方が勝てる」などという記述を読んだら、そのモチベーションが無くなってしまいました。とはいえ、“ほったらかし”も、それなりの戦略は必要なので、今後はそちらに注力していこうと思っています。

ちなみに、書籍「まぐれ——投資家はなぜ、運を實力と勘違いするのか」は、爆笑カテゴリーとして購入しました。皮肉に満ちた楽しいフレーズが多く登場するので、「このフレーズ、どこかでパクってやろう」という邪（よこしま）な意図で、今回、書き込み用の本として購入しました。

ついでに、今回の（お金シリーズの）コラムに関係がありそうな本の中でも、私が特に好きな本を4冊ご紹介しておきます。

「お金」関係で江端の『好きな』本

読む本に偏向はあるかもしれないけど・・・

書名	フラッシュ ボーイズ	ファスト& スロー	ブラック・ スワン	マネー・ ボール
(江端の) 要旨	私たち素人は、プロの投資家の「いいカモ」になるしかない	行動経済学に関する、歴史と、具体例が満載	「サブプライムローン危機」の発生を、ロジカルに説明	「プロのスカウトたち」が、統計データの前で“無能”を露呈
表紙				

「人間の直感は、まったくダメダメ」という話

理系のエンジニアの中でも、特に通信系に従事されている方には、「フラッシュボーイズ」を強くお勧めします（映画化された方はダメです。お勧めしません）。「マネー・ボール」は、ブラッド・ピットさんの主演の映画で有名になりましたが、理系の方なら、本の方に興奮されるでしょう。

人間の直感は、データや技術に勝てない —— という山のような現実の事例が、理系の知的好奇心を揺さぶるであろうことを、私（江端）が保証いたします。

□

では、今回の内容をまとめます。

【1】これまでの4回の連載で調べてきた投資手法をまとめたところ、(A) テクニカル分析、(B) のファンダメンタルズ分析、(C) アノマリー分析、(D) ランダムウォーク分析、の4つに大別できることが分かりました。これらは、全く別々の手法であるにもかかわらず、これらの知識がない初心者は、最初に始めた手法を、唯一の手法と勘違いしてしまうおそれがあることを示唆しました。

【2】上記の中でも、特に「(D) ランダムウォーク手法」について詳しく解説しました。ランダムウォーク手法は、「**株価（金融商品の価格）の予想はできない**」という“**潔い諦め**”から出発し、過去の株価の動きから算出した、平均値（リターン）と標準偏差（リスク）だけを用いて、投資方法を決める方法であり、『ウォール街のランダム・ウォーカー』の著者によれば、長期的投資としては、『**最強の投資**』であると主張していることを説明しました。

【3】現時点における、投資理論に関しては、大きく2つのカテゴリー、(A) 行動経済学手法を用いる投資家心理、と (B) 数学手法を用いる金融工学、があることを説明し、特に、(B) の一つである、現代ポートフォリオ理論について詳しく説明しました。具体的には、複数の金融商品を組み合わせる（ポートフォリオ）運用を行うことによって、**リターンを上げながら、リスクを下げられるという、「標準偏差の魔法（江端命名）」が使えることを示しました。**

【4】常日頃から「市場の反応は……」というニュースキャスターの語り方に、「市場ってやつは、そんなにかしこいやつなのか？」と不快を感じており、市場とは何かについて、私なりに調べてみました。その結果、市場というものは、**私（江端）が考えているほどクレバーでもなく、特に熱狂時の市場は、手がつけられないほどの馬鹿になる、**ということ、を、実例を上げて説明しました。

【5】ランダムウォーク分析と、現代ポートフォリオ理論を組み合わせでできている、**インデックス投資商品**が、江端の投資方法として、（デメリットも含めて）受け入れ可能で、かつ、なにより**ラクそう**である、という検討結果を示し、この投資方法を行っていくことを決めました。

【6】江端が、この連載の開始時から読んできた本を、上記【1】のカテゴリーに分類して、簡単に紹介しました。

以上です。

江端がそっと教える勧誘撃退法

相変わらず、SBI証券と楽天証券からのメールがすごいです（一方、暗号資産に関するメールは、ぐっと減っているように感じます）。「株の購入」「新規公開株の案内」「円安時の投資戦略」「電力不足に強い会社」など、よくもまあ、これだけ、いろいろなネタを撃ち込めるものだ、と感心しています。

ただ、私が調べている限り、

—— インデックス投資の商品を買って、そのまま放っておけ

という内容のメールは、今まで一度も見たことがありません。

これは、海外のファンドの多くが成功報酬によって成り立っているのに対して、日本のファンドは取引による手数料を主要な収益源としているからだ、といわれています。ならば、証券会社が、あの手この手のセールストークを使って短期間での売買を勧めるのは当然だと言えます。

つまり、ユーザーにより、ほったらかし投資（e.g. インデックス投資）の選択は、**証券会社にとっては、最悪の選択になる**訳です。言われるがまま、商品の乗り換えをしてくれる顧客が、「おいしい」お客さまなのです。

思い出してみると、バブル景気の頃、さまざまな投資話の電話が、職場にかかってきました。多かったのは、「マンション投資」だったような気がします。その他にも、うさんくさい話は山ほどありました（[例えばこちら](#)など）。

私は相手がしゃべっている最中で電話を切るのに、1mmも抵抗がありませんでしたし、開口一番、『**おい、お前。まずは、私の電話番号をどこから入手したか吐け**』と言える人間だったので、2回目の電話は、ほとんどかかってきませんでした。

以前、この手のトラブルで、相談を受けたことがあります。

(From 質問者)

自宅にかかってくる電話だけでなく、会社にかかってくる電話にも有効 なのでしょうか？ もしそうであればぜひご教授くださいませ。（最近やたらと、先物取引の勧誘電話が白昼堂々会社にかかってくるのに苦勞させられています）

(From 江端)

江端のサンプル回答集を送付します。

- 先物関係：「小豆相場で、父が5年前に自殺しました」
- 宗教関係：「私はゾロアスター教の川崎支部長なのですが」
- 英会話関係：「前回のTOEICスコアが950だったのですが、980まで上がりますか？」
- パソコン関係：「SCSIバスの規格が、フルピッチ50pin対応なら購入しますが。」

特に、私の、宗教の勧誘の撃退率は100%です（[筆者のブログ](#)）。

ちなみに、パワハラで何人も部下をつぶし、退職に追い込んでいた、最も軽蔑し、生まれて初めて私が心底から「死んでくれないかな」と思うに至ったアホ上司は、

「ほう、絶対にもうかるのか。じゃあ、あんたの金で、その投資をして、もうかった分だけを、私に回してくれよ。絶対にもうかるなら問題ないはずだよな」

という、その品性を裏切らない、最低最悪の下品な電話対応をしていました（私は、この対応自体は好きでしたが）—— と、今、書いていて、気が付きました。

私もまた、同僚や後輩から、下品なパワハラ野郎として、心底から「死んでくれないかな」と思われているかもしれない

—— ということに。

あのアホ上司は、『自分が人気者』だと信じていたようです（証言多数あり）が、私は「自分だけは嫌われていない」と思い込めるほど、無能な研究員ではなかつもりです。

まあ、この連載の内容でも、日常の振る舞い（嫌いなやつへの対応など）でも、「江端、死んでくれないかな」と思っている人が少なからずいることは、確実だと思います。

でも、あなたは、わざわざ、そんなこと、私に言いに来なくてもいいですからね——私（江端）が会社から消え去る時間は、既にカウントダウンに入っているのですから。

もう少しの辛抱です。

「わが国に未来はない」と考える若者たち

後輩：「江端さんが『心底から「死んでくれないかな」と思うに至ったアホ上司』って、“ヤツ”ですか？」

江端：「そうだ。“ヤツ”だ。私の10年上の先輩から10年下の後輩に至るまで、パワハラを与え続け、多くの研究員を退職や病院送りにした“ヤツ”だ。私もめったなことではこんなことは言わないようにしているが、いまだに、“ヤツ”が『息をしている』と思うだけで、腹が立つ*）」

*）ちなみに、“ヤツ”に関する、江端への問い合わせは一切禁止とします。問い合わせてきたら、その文面を無許諾で公開します。

後輩：「江端さんの『あとがき』を読んで、とても爽快な気持ちになってしまいましたよ——この『あとがき』が今回の本編と、どういう関連があるかはさておき、実にさわやかな読後感です」

江端：「いや、ちゃんとレビューしてもらえないと困るんだが」

後輩：「そうですねえ、今回の江端さんのコラムを読んで感じたことは、『投資世代のタイミングの難しさ』ですね」

江端：「タイミング？」

後輩：「だって、江端さん。考えてみてくださいよ。あのバブルの時期に、インデックス投資——という金融商品は、まだなかったかもしれませんが——をしているやつがいたら、『バカ』って言われたに決まっていますよ。あの時代、株や土地の値段は“上がる”ことが決まっています。そもそも、十分な収入があって、預金の必要すらない、と思えるほどの好景気だったじゃないですか」

江端：「確かに、あの時代に『ほったらかし投資』とか言ったら、バカ扱いされていたことは、間違いないな」

後輩：「インデックス投資は、長期間投資で、今の時代にマッチしていて、その投資を開始するタイミングは早ければ早いほど良いです——が、これほど、若者にとって魅力のない金融商品もないでしょう。ひとこと言えば『地味』ですから」

江端：「若い世代こそが、最強の投資家になれるのにもかかわらず、インデックス投資は、彼らにとって、最もやる気の出ない金融商品、と——なるほど」

後輩：「で、江端さんのように、完全にスタートを切り損ねたシニアが、今頃になって、そのすごさ（価値）に気が付く、というわけです。江端さん、この連載、20年前に始めていれば良かったですね」

江端：「EE Times Japanに声をかけてもらったのさえ、10年前だから、それは無理というものだが。それに20年前に、私が、今の悲惨な状況（お金に愛されないエンジニア）になる未来を、想像できたかも、ものすごく疑わしい」

後輩：「うん、分かります。若い頃の、あの訳の分からない『なんとかなるさ』という気持ち、一体どこから湧いてきたんでしょう？」

江端：「タイムマシンで20年前に戻って、自分に説教できたらなあ……」

後輩：「いや、江端さん。仮にタイムマシンがあったとしても、江端さんは、20年後の自分の話、絶対真面目に聞かないと思います。『私は、あんたみたいにはならない』とか思いながら、未来の自分の説教を聞き流します」

江端：「私もそう思う。本当に、あの根拠のない未来への自信は、一体どこからやってきたんだろう……」

□

後輩：「ただ、江端さん。最近の若者は、ちょっと違うかもしれませんよ」

江端：「ん？」

後輩：「彼らの話を聞いていると、わが国に未来に対する信頼感の欠如は、想像を絶するものがあります」

江端：「『わが国の未来を信じられない』ということ？」

後輩：「正しくないです。彼らは『わが国に未来はない』という前提で行動しているんですよ。彼らは、現在の行政サービスが全て消え失せた日本国をイメージしているんですよ —— 話を聞いて、正直怖くなりました」

江端：「それって、国が悪いとか、政治家が悪いとか、そういう次元の話ではなくて——」

後輩：「ええ、もう、彼らには、そういうオブジェクト（対象）が“ない”んです。そりゃ、オブジェクトがなければ、選挙に行く必要もないですよ。彼らの低い選挙の投票率は、極めて合理的な行動の結果と言えます。いくら、江端さんが、若者を煽（あお）っても無駄なんですよ*）」

*）[筆者のブログ](#)

江端：「じゃあ、この私のコラムの読者層は、シニアではなくて、むしろ、若者にミートする、ということかな？」

後輩：「いや、そんな「すてき」な話ではありません ——

江端さんの今回のシリーズ、『今ごろ、何言ってんの、この人?』と、若い世代から、失笑され、冷笑され、嘲笑され、爆笑されている可能性すらあります」



Profile

江端智一（えばた ともいち）

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈（しれつ）を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣（しんらつ）な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[こぼれネット](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

Copyright © ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

 ITmedia Inc.